

# 増える「認サボ」広がる安心

4/15 勧母

## 住民8割受講 早期発見助ける

認知症について学び、できる範囲で支える認知症サポーター

が全国で1千万人を超えた。その広がりが早期対応や治療に結びつくケースも出てきた。

▼1面参照

## 福井・若狭

講座を受講した。人口の約8割にものぼる。

看護師が高齢者宅で脳の模型を使いながら一対一で教える。サポーターを増やしていった。婦人会や地域の集まりにも呼びかけた。その結果、認知症を隠さず、「うちの親が困っているようだたら教えて」と近所で声を掛け合うオープンな雰囲気が広がった。

地域で認知症の中心的な医療機関に指定されている敦賀温泉病院(福井県敦賀市)によると、若狭町では周辺の市町より早期に受診



全国キャラバン・メイト連絡協議会の資料から

する人が多く、その分、重症度が低かった。玉井駅院長(64)が2012年について調べたところ、初診段階で症状が軽度以下の人があつた。

若狭町で75%だったのに対し、周辺市町では50~64%にとどまつた。入院が必要な人の割合は周辺市町の半分以下だった。

2年前にサボーターになつた石垣宣子さん(77)は患者と2人暮らし。自分が認知症にならないとも限らないと想え、講座を受けた。

若い人たちに「私がおかしな様子だったら、本人はわからない」とお願いしている。「早い段階で気づきがほしい」と言つた。

サボーターでつくる「うごまちキャラバン・メイト」認知症サポーター協会の会員は約60人。認知症の人たちの居場所づくりの一環で、農園でブルーベリーを育てたり、見守り活動の勉強を重ねたりしてきた。認知症の人と住民が交流する認知症カフェを設け、予防に効果があるとされるトレーニングも試みた。



公民館で開かれた認知症カフェ。毎回、認知症の人ら10人ほどが集う=秋田県羽後町

## 店やタクシーも協力

秋田県羽後町でも、助け合いの精神が広がり、認知症的人に素早い支援ができる

るようになつてきた。2年前にサボーターになつた伊藤宣子さん(77)は「認知症になつても安心して暮らせる社会を広げていきたい」と話す。

「道を迷つているようだ」といった情報が頻繁に寄せられるようになった。伊藤さんは「支援や治療が必要な人を、素早く介護や医療につなげられる」と評価する。

支援の質が課題

「サボーター制度の課題は「量から質」への発展だ。だけでは十分に理解が深まらず、活発に役割を果たすのが難しいとの声もあり、行政や支援団体にサボーターの活動を促す態勢づくりが求められる。人数が少ない20代~40代の取り込みが重要とされている。

事務局を担う全国キャラバン・メイト連絡協議会はいま、サボーターの能力を伸ばし、より実践的な活動につなげてもらうためのステップアップ講座に力を注ぐ。協議会の菅原弘子代表(73)は「認知症になつても安心して暮らせる社会を広げていきたい」と話す。